

## 寄せ場と在日朝鮮人

釜ヶ崎の手配師、人夫出し業者は朝鮮人が多い。釜ヶ崎のなかの商店主も朝鮮人が多い。こうした事から日本人労働者の中に、朝鮮人差別―敵視する傾向が強くみられる。しかし、在日朝鮮人こそ、土方―日雇労働者の闘いの大先輩であり、仲間であることを知らなければならぬ。

なぜ、日本に朝鮮人が多いのか

一九一〇年（明治四三年）、日本が武力を

背景に韓国を併合したあと、多くの朝鮮人の農地を強制的に取りあげた。農民たちはやむをえず日本に仕事を求めてきた。しかし彼らは何の技術ももたないがため、必然的に日本人の嫌がる仕事や、力仕事にしかありつけなかった。

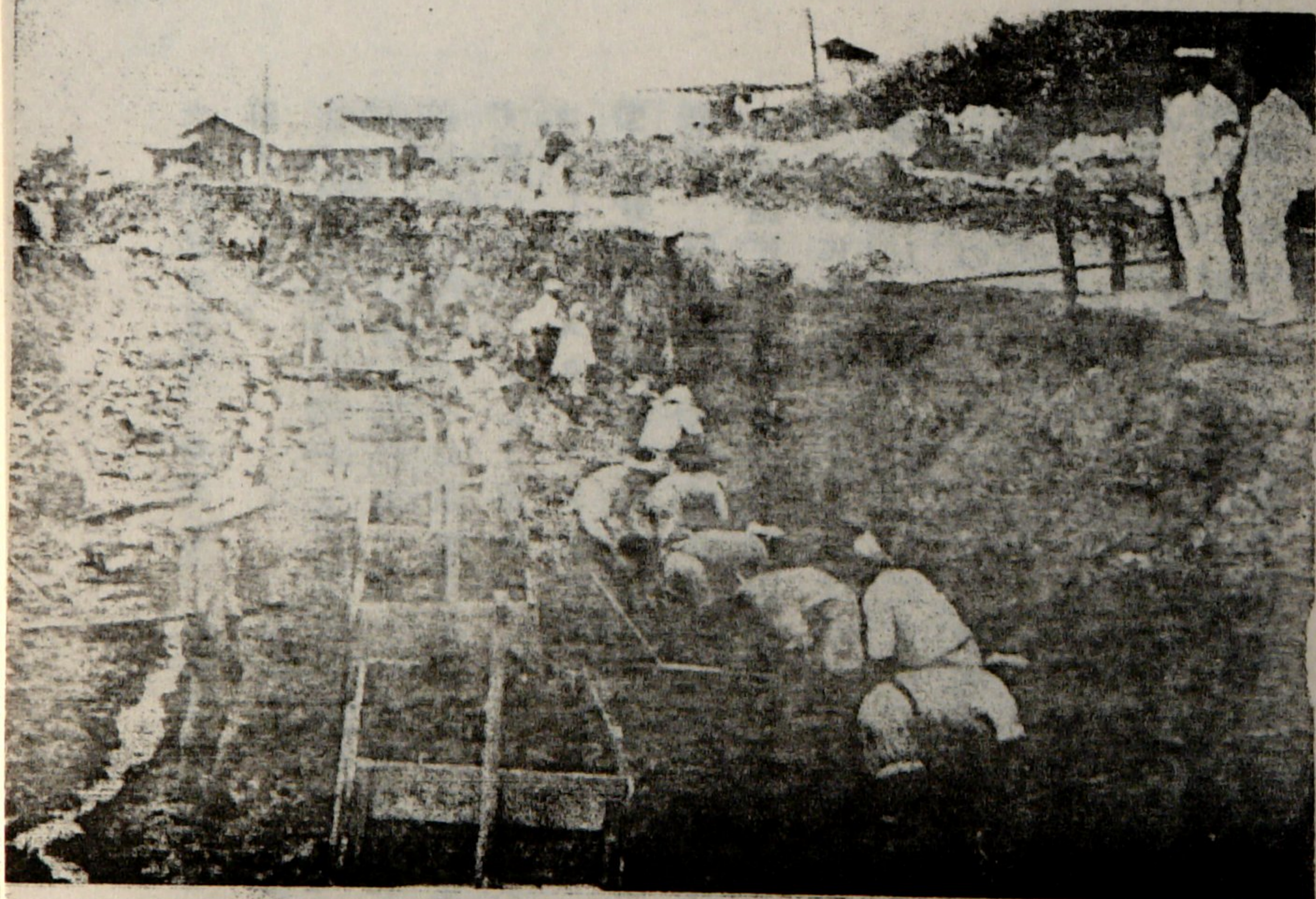
こうして、多い時には「土工」の三分の一を朝鮮人が占めるほどだった。こうした渡航来日朝鮮人は、太平洋戦争終了までに一七〇万人にもおよんでいる。

これら半強制的渡日者とならんで、文字通り強制的に連行された人が三七万人にもおよぶ。日本の侵略戦争が激化するにつれ、日本人成年男子の大半が兵隊にとられる中で、祖国を追い出されて渡ってくる朝鮮人だけでは足りないとはかりに、鉾山主や土建屋が軍部に泣きついて、強制的に朝鮮から連行してきた人たちだ。

戦争が終了して、多くの朝鮮人が帰国したが、日本にメチャクチャにされた祖国に帰っても仕事がないのは目にみえており、しばらくは日本で働いて生計をたてるしかないとい、五〇万人以上の人々は日本に残った。

なぜ、土建屋に朝鮮人が多いのか

すでに書いたように、朝鮮人は渡日しても、土方になるしかなかった。ことばも十分に通



九州八幡市における朝鮮人の土工たち

しないし、仕事も知らない。そのために日本人土方から馬鹿にされ、差別された彼らは、一所懸命働いた。今や「掘り方」では朝鮮人になわなわいと言われるほど、よく働いたよ  
うだ。

戦後、占領軍のGHQが、ヤクザ的土建屋  
や人夫出しの追放を決めたことから、朝鮮人  
が土方をとりしきるようになった。(人夫出  
し追放は法律で定められたが、その後改悪さ  
れて、実質的には容認され、現在に至って  
いる。)

在日朝鮮人工一最の出世頭である壺山建  
設は、GHQからトラックを払い下げてもら  
い、大林組の土工を一手に引き受けるよう  
になった。

横浜・寿のドヤ街も、占領軍資材置場が朝  
鮮人に払い下げられ、そこにドヤがたてられ

あまり朝鮮人であることを明らかにしない。  
それは日本人の差別、べっ視がきついからだ。

### 土方―日雇労働者の

#### 闘いの先輩としての在日朝鮮人

戦前の日雇労働者―自由労働者組合の闘い  
の中心は在日朝鮮人だった。

彼らは、日本人より四割から五割も安い賃  
金でこきつかわれ、仕事がひまになるとまっ  
先に首を切られた。最初は、日本人なみの待  
遇を、という要求から始まった。しかし当初  
は、日本人土方との対立のほうに激しく、民  
族間のけんかのように報道されていた。これ  
は、日本人土方の要求が通らないのは、安く  
ても働く朝鮮人がいるからだという資本家の  
うそにだまされた日本人土方が、その不平不  
満を資本家ではなく、朝鮮人にぶちまけたか  
らに他ならない。

たのが始まりで、今でも、大半の経営者が朝  
鮮人である。

日本で生まれ育った二世たちは、どんなに  
頭がよくても、役所はおろか、民間企業にも  
差別のため、大半は就職できない。やむをえ  
ず親のやっている土建屋や、ゴム、プラスチ  
ック工業、スクラップ屋といった日本人の嫌  
う仕事を受けついでいくしかない。その土建  
屋も、朝鮮人である限り、公共事業や大工事  
の元請にはなれない。壺山建設の親父は、そ  
のため日本に帰化したほどだ。結局、下請、  
孫請にしかなれないようにされている。これ  
が元手のいらぬ人夫出し飯場、土方飯場に  
朝鮮人が多い理由である。

朝鮮人は親方ばかりやっているわけではな  
い。労働者も多い。在日朝鮮人男子労働者の  
12%は土建業に従事している。だが、彼らは

闘いの中で多くの朝鮮人労働者が虐殺され  
るようになり、信濃川発電所工事での虐殺事  
件がきっかけとなり、日朝労働者の共同闘争  
が始まるようになった。しかし、民族的抑圧  
と階級的抑圧の二重の苦しみをもった朝鮮人  
労働者は、いつも闘いの先頭に立ち、また、  
自由労組や、土建労組の多数を占めて闘って  
きた。

今日の日雇労働者のいくつもの権利―労災  
保健、アプレ手当、日雇健康保険などは、  
彼らの闘いの成果であるといっても過言では  
ない。

(アッシュラ)

〔必読文献〕

朝鮮人強制連行の記録 朴慶植 未来社  
雨の慟哭―在日朝鮮人工の生活史

金賛汀 田畑書店

(日雇全協発行「連帯の炎」準備号より転載)